

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第11回)

イギリス人の家は城である、かな？

T. ラティガンの戯曲『深く青い海』(*The Deep Blue Sea*, 1952) は、フラットの一室で女性が自殺未遂をした場面で始まる。火のついていないガスストーヴに頭を突っ込んでガス栓をひねったのだが、未遂に終わったのは、コイン式のガスメーターが切れてガスの供給が止まったからである。昔のイギリスの(それほど高級ではない)フラットの電気やガスは、こうした部屋ごとに設置されたコイン式のメーターを通して支給されていた。コインが切れてガスが止まり自殺もできないとは、生活のさもしさを表す巧い手法だと思っていたが、自分が夫婦で留学して初めて暮らしたロンドンのフラットが当時すでに珍しくなっていたこのコイン式メーターで電気とガスを使用するスタイルだとわかったときにはちょっと複雑な気持ちになった。コインを足し忘れていて、夜中に突然電気が切れたり、料理中に火が弱まってそのまま消えてしまったりすると、本当にさもしい気分になったものだ。

留学期間を終え、帰国まで数週間を、有り金叩く覚悟でもうちょっといい部屋に住もう、と不動産屋に相談に行き、短期で契約できる部屋をいくつか紹介してもらった。そのうちの一軒を妻と二人で訪ねて行ったときのこと、玄関のブザーを鳴

らすと、大家さんと思しき女性がドアを開けて「はい？ 何のご用？」と言う。「部屋を見せてもらいに来ました」「どうして?」「いや、どうしてって、不動産屋から連絡あったと思うのですが」「まあいいわ。どうぞ、ちょっと改装とかして取り込んでるけど…」確かに、改装工事中ということで、あまり「素敵」な見た目とは言えない。「あ、う、寝室は?」「寝室は2階よ、どうぞ」と言われて2階の寝室のドアを開けると、狭い部屋の中央に大きなベッドがあって、その上に小学生からティーンエイジャーぐらいまでの男の子が4人寝そべり、テレビを見ている。「あ、失礼。部屋を見せてもらってるんですけど…」「…(無言)」このとき、サッと見回して部屋の様子を確かめると、全体的に薄汚れている上に、壁紙が剥がれてレンガが剥き出しになっているのがわかった。「なかなかいい部屋でしょ、とっても快適よ」と言う女性に「ええ、本当に」とお世辞とお礼を言って、その家を出てからの帰り道。「なんだか、さもしいと思っていた我々の部屋は結構いい部屋だったんだね」と妻と話していて気が付いた — あ、今訪ねて行った家、住所が違ってた…。それにしても、どうして部屋を見せてくれたのだろう…?